

## G-6 家庭科教育における指導内容の変遷(第2報)――住居領域について――

大阪教育大 新福祐子

**目的** 筆者は小中高校の住居領域の学習はどうあるべきかを、いろいろな方向から検討している。今回は過去の教育の中でそれがどう扱われてきたか、その本質とともにるべきものは何であるかを歴史的発展の中から求めようとするものである。

**方法** 高等女学校で使われてきた家事教科書のうち、明治から大正、大正から昭和へと改訂を重ねた長い教科書をえらび、その内容を検討し改訂の主眼点をみた。

**まとめ** 明治時代には、「住」の内容は「住居の選択」「家の建て方」「保存法」の三項目を骨子として据えていた。そして住が家庭生活を総合的に学習する場として、また学習の導入的役割をもって、教科書の冒頭に位置づけられていた。そして明治では、その当面での住居についての内容が重点的に取扱われ、大正にはいると欧米の知識・道具・設備を加えて、住居の改善やよりよく住むための実践的学習になった。昭和になると日常生活の改善・合理化を目標としてさらに生活改善の色彩が濃くなり、家族本位の間取りとか、転住の分離、椅子式生活の加味、私室と共同室の併設といった考え方までできている。しかしまもなく戦争のための節約型合理化教育となって、その本質からはずれてしまった。住居の学習は明治で骨子ができ上り、大正で内容が充実し、昭和で生活との関係を打出したといえる。戦後の住居の内容は、根本目標が「家」から「私」へ変わったせいかあって、上記の延長上ではなく、新しく出発したものであるが、やはりその本質は見失ってはならないと考える。さらに戦後から現在までの検討を行い、住居の指導内容についての試案をまとめたい。